I-8

全国 14 の盲導犬訓練施設の現状の調査報告

盲導犬訓練施設の建築計画に関する研究 －その 1－

Survey on the Guide Dog Training Center of 14 Facilities in Japan

Study on Architectural Planning of the Guide Dog Training Center -part 1-

○石森祥太 [1]，渡辺富雄 [2]，矢野裕芳 [3]

*Shota Ishimori[1]，Tomio Watanabe[2]，Hiroyoshi Yano[3]

This research report is to clarify actual architectural conditions of the guide dog training centers in 14 of all Japan. We conducted questionnaire survey, drawing collection and site visits.

The following points became clear; ① scale of facilities, ② form of facilities and departmental configuration of rooms, ③ number of staffs and annual training dogs, ④ actual work guide dogs.

keywords:guide dog training center, form of facility, function, configuration of rooms, field survey

1. はじめに

平成 14 年 5 月 29 日「身体障害者補助犬法」が施行された．現在，年間 130 頭弱の盲導犬が訓練されているが，全国で 7800 人の人が盲導犬を希望し待っている状態である．イギリスやアメリカ，オーストラリアなどに比べ，盲導犬の数や，社会的な認識の面でも後れを取っている状態である．また，施設計画において既往研究はなく計画の基準もない状態である．

2. 目的と調査方法

盲導犬訓練施設における概要・所要室などを明らかにすることを目的とした. 調査はHP参照､施設アンケートにより基本データや図面を収集し，一部施設を除き現地視察とヒアリング調査を行った．

3. 調査対象

調査対象と結果は表 1 にまとめた。全国 11 団体 14 施設を対象としている．尚，次項の図版はそれぞれのデータが取れた施設のみをサンプリングしている．

4. 調査結果

4 - 1. 施設概要

各施設を比較すると，図 1 のように大きく 3 つの部門分けられると考えられる．図の色分けはそれぞれの行為対象の行動範囲を大まかに示している．「犬舎部門」は盲導犬を育成スタッフが盲導犬を育てるための部門となる．訓練犬*1，職員やスタッフ，場合によっては共同訓練者が使用する．「訓練部門」は、盲導犬を使用するユーザーが共同訓練*2 を行うために使用する「共同訓練部門」と，施設内で共同訓練を行う場合や視覚障がい者の生活指導・一般の方の見学の際などに利用する「研修部門」に分類される．「事務･管理部門」は，事務スペースや施設管理のセクターで事務スタッフなど職員が利用する．

施設の全体計画において，「犬舎部門」と「その他の部門」と 2 つの要素で構成されていることが多く，それらの構成を図 2 のように，「積層一体型」「積層分棟型」「平面一体型」「平面分棟型」の 4 つに分類した．各施設は表 2 のように分類され，多くは積層分棟型であることがわかる．積層分棟型の多くは郊外にあり、かつ敷地がある程度しか確保出来ないことが考えられる．次項の図 3 で示しているが，敷地面積や延床面積によって，プランタイプが変わると考えられ，積層一体

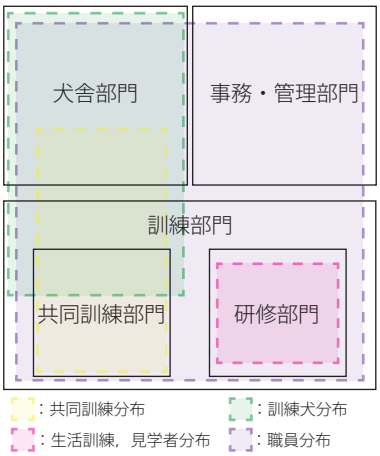

Figure1. Configuration of department.

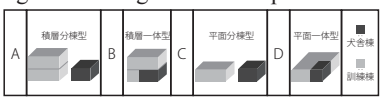

Figure2. Form of the entire building.

Table1. Investigation facilities.

	施設名		アンケート結果 アンケート	図面	パンフレット	現地調査
1	公益財団法人　北海道盲導犬協会		○	○	○	2013.9.2
2	公益財団法人　東日本盲導犬協会		○	○	○	2013.8.23
3	公益財団法人　日本盲導犬協会	日本盲導犬総合センター「富士ハーネス」	×	○	○	2013.7.26
4		神奈川訓練センター	×	×	×	―
5		仙台訓練センター	○	○	○	2013.8.23
6		島根あさひ訓練センター	×	×	×	―
7	公益財団法人　アイメイト協会		○	○	○	2013.7.8
8	公益財団法人　中部盲導犬協会		○	○	○	2013.8.9
9	社会福祉法人　日本ライトハウス盲導犬訓練所		○	○	○	2013.9.20
10	公益財団法人　関西盲導犬協会		○	○	○	2013.8.8
11	社会福祉法人　兵庫盲導犬協会		○	○	○	2013.9.20
12	公益財団法人　九州盲導犬協会		○	×	○	―
13	公益財団法人　日本補助犬協会		○	×	○	2013.7.22
14	一般財団法人　全国盲導犬協会		―	―	―	―

Table2. Location and the entire building form (plan types).

	周辺環境	プランタイプ（事務棟階数－犬舎棟階数）	建築年
北海道	郊外（住宅地）	A　3－3	2002
東日本	郊外（山間）	A　2－1	2000
富士ハ（日）	郊外（平地）	C	2006
仙台（日）	郊外（山間）	A　3－1	2001
アイメイト	都心部(住宅地)	B　3	1996
中部	都心部(市街地)	A　4－1	2003
ライトハウス	郊外（山間）	A　2－1	1995
関西	郊外（山間）	B　2	1989
兵庫	郊外（山間）	A　2－2	2004
補助犬	郊外(幹線道路沿い)	A　2－1	2012

1：日大理工・院（前）・建築　Graduate Student,Dept.of Arch.,CST.,Nihon Univ.
2：日大理工・教員・建築　Associate Prof.,Dept.of Arch.,CST.,Nihon Univ.
3：日大理工・建築・上席客員研究員　Senior Visiting Scholar, Dept. of Arch., CST., Nihon Univ.

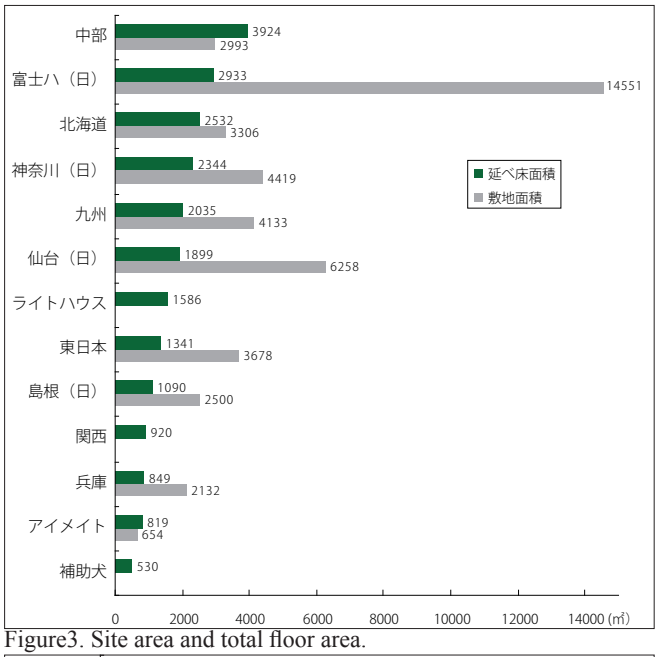

Figure3. Site area and total floor area.

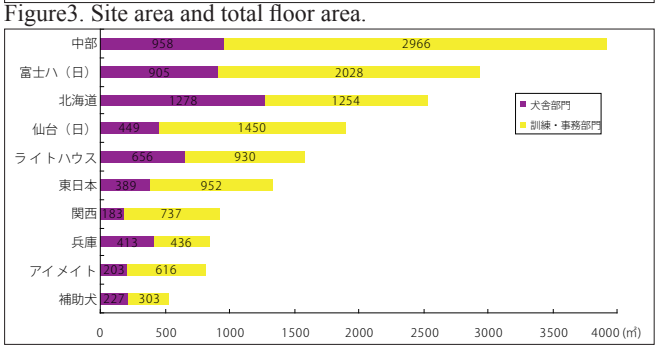

Figure4. Floor area of the kennel .

型になっている施設は都市部にあり敷地面積が小さいことがあげられ，平面分棟型には敷地面積が大きい施設があげられる．犬舎部門とその他の部門の面積比は図 4 に見られるとおり，全体の延床面積と犬舎部門の面積は比例せず，犬舎部門の面積は施設ごとの大きな面積の差は見られない．延べ床面積は 850 ～ 3900 ㎡となっている．

4 - 2. 各部門の諸室構成

各部門の主な必要諸室を図 5 において，データのある 11 施設をサンプリングし，有無をカウントした．

犬舎部門は，犬が訓練中生活する訓練犬室，犬に定期的な排泄をさせるための排便室，犬の手入れをするためのグルーミング室などは必要な諸室であることがわかり，また，施設ごとに形態は大きく異なる．対して，フリーランなどは必ずしもあるわけではなく，施設によっては訓練の妨げになると考える場合[*3]もある．

訓練部門の共同訓練部門は，寝泊りする共同訓練居室，共同の食堂，洗濯室は必ず必要とされ，共同訓練専用のグルーミング室や排便室はある場合とない場合がある．研修部門では，式典や見学会などの PR のための諸室としての多目的室があることが多い．

＊1 訓練犬：盲導犬になる可能性のある犬のこと．盲導犬になることができるのは30%程度．
＊2 共同訓練：盲導犬になることができた犬とユーザーがマッチングを見て，ユーザーの盲導犬を使うための宿泊訓練．
＊3 フリーランについて：フリーランは伸び伸びと育てるために必要という施設と，犬を教育する上で妨げになると考える施設があり，必要性が大きく異なる．

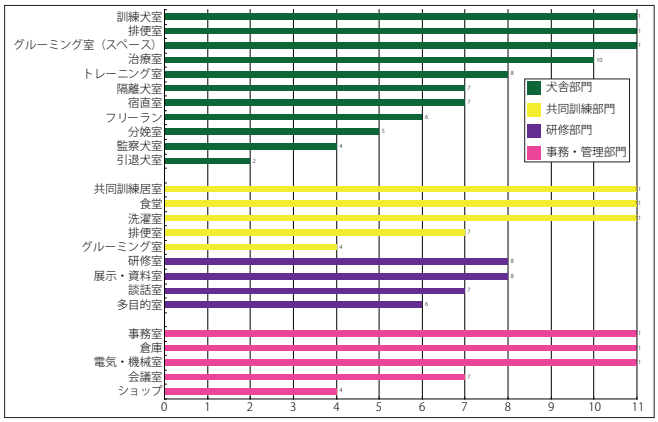

Figure5. Configuration of rooms (departmental).

4 - 3. 訓練頭数とスタッフの数

盲導犬訓練施設を計画するにあたって，現在の各協会の訓練犬育成頭数と職員の人数を比較することは重要な点である．図 7 に 2012 年の各施設の訓練犬頭数と職員の人数を示した．各協会の訓練犬育成頭数は最少が 2 頭に対して最多が 25 頭であり，協会ごとに大きな偏りがあることが分かる．職員数はあまり比例せず，要因として各協会の持つ経験や方針の差，PR にあてる時間の差などが考えられる．図 6 は実働頭数を示したもので，新たな協会もでき，今後 1, 013 頭から増えることも期待できる．

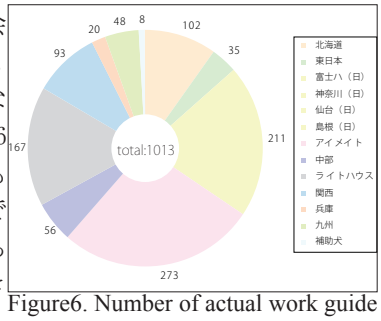

Figure6. Number of actual work guide dogs.

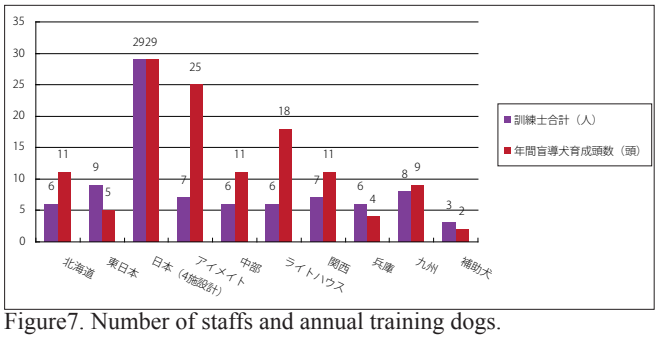

Figure7. Number of staffs and annual training dogs.

5. まとめ

①盲導犬訓練施設は犬舎部門，共同訓練部門，事務・管理部門，研修部門で構成される．

②延べ床面積は 850 ～ 3900 ㎡となっていて，積層・分棟の差は立地性に大きく左右される．

③訓練犬室，排便室，グルーミング室など独特な機能や共同訓練のための宿泊するため諸室が必要となる．

今後の課題として，盲導犬の適した訓練法を訓練士や獣医学の見地，また視覚障がい者にとっての諸設備や，盲導犬ユーザーからの視点をもとに考察することがあげられる．

参考文献
(1) 神作博；『「盲導犬による視覚障害者の歩行支援」歩行者支援の実態と展望』；2000
(2) 自立支援施設部会盲導犬委員会；『平成 24 年度 盲導犬訓練施設年次報告書』；2013
(3) 日本財団；『「盲導犬に関する調査」結果報告書』；1998
(4) 石森祥太 他；『盲導犬訓練施設の諸室構成について－日本国内の 12 施設の事例調査を通して－』日本建築学会大会学術講演梗概集；2013